

聖書: ヨシュア記 11 章

説教題: その地をことごとく

日時: 2010年6月27日

ヨシュア記全体は1～12章までのカナン占領の記事と、13章以降の土地分配の記事の二つに分けられます。そして来週見る12章は、ヨシュア記前半の戦いの成果をまとめた章となっていますから、今日の11章で約束の地における大きな戦いは終了することになります。最後の23節に「その地に戦争はやんだ。」と記されている通りです。

さて前回の10章ではカナン南部の諸都市との戦いが記されましたが、今日の11章はカナン北部の町々との戦いが記されます。カナン南部におけるイスラエルの勝利を聞いて、北方のハツォルの王ヤビンは危機感を強め、連合軍を結成します。一人の王の呼びかけによって連合軍が組織され、イスラエルに立ち向かうという図式は南部の場合と同じです。しかし今回は前回とスケールが違います。今回はカナンの地における最後の決戦です。イスラエルにこの地を全部取られてしまうのか、それとも打ち負かすことができるのか、運命をかけた戦いです。そこで北部連合のリーダー、ハツォルの王ヤビンは広い地域からありつたけの兵士たちを集めます。その結果、4節に「その人数は海辺の砂のように多く」とあります。海辺の砂を思い浮かべて、あれだけの人数が集まった状態を想像するならどうでしょうか。それはまさに無数の人々です。4節に「馬や戦車の数も非常に多かった」とあります。イスラエルにしてみれば、彼らが持っていないような当時のハイテク武器。その数も非常に多い。この光景を思い浮かべるなら、今回の戦いが今までとは大きく異なる特別なものだったことが見えて来ます。

さすがのヨシュアも、これを前にして恐れる気持ちを抱いたようです。6節の主の「恐れてはならない。」という言葉がそのことを暗示しています。しかし主はヨシュアに言われます。6節:「彼らを恐れてはならない。あすの今ごろ、わたしは彼らをことごとくイスラエルの前で、刺し殺された者とするからだ。あなたは、彼らの馬の足の筋を切り、彼らの戦車を火で焼かなければならない。」ここに主のメッセージが示されています。それとは、このような非常な困難の中でも、わたしに信頼せよ!ということです。目に見える状況が自分を圧倒するようなものであっても、恐れてはならない。わたしがあなたの手に彼らを渡すのだから!ということです。その際、主は「彼らの馬の足の筋を切り、彼らの戦車を火で焼かなければならない」と言っていますが、これはどういう意味でしょうか。9節を見ると、敵に勝利した後、イスラエルは馬の足の筋を切り、彼らの戦車を火で焼いたようです。つまり戦利品としてそれらを得て、自分たちの武器として利用するようなことをしない、ということです。それはイスラエルがこれからも馬や戦車ではなく、主にこそより頼むためです。そこに彼らの力があることをいつも覚えて、人間的な力により頼まないためです。今日の箇所と非常に関係のある申命記20章1節で主はこう言っていました。「あなたが敵と戦うために出て行くとき、馬や戦車や、あなたよりも多い軍勢を見ても、彼らを恐れてはならない。あなたをエジプトの地から導き上られたあなたの神、主が、あなたとともにおられる。」また詩篇20篇7節:「ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。」

このような主の約束を頂いて、ヨシュアは北部連合軍との戦いに進んで行きます。7節の「そこで、ヨシュアは戦う民をみな率いて、メロムの水のあたりで、彼らを急襲し、彼らに襲いかかった。」という言葉は、ヨシュアがいかに主の言葉に確信を得て前進して行ったかを表しているでしょう。この思

わぬ攻撃を受けて、北部連合軍は思わず後ずさりをしたようです。その結果、彼らは山地へと追いやられ、彼らの戦車は使い物にならなくなります。そしてヨシュアは圧倒的な勝利を取めます。もともとおびたしい数の兵士たちがここに集められていましたから、その敗北は決定的でした。ヨシュアは9節で、敵が持っていた馬の足の筋を切り、戦車を火で焼きます。主が命じられた通りです。

そのヨシュアのしたことが10節からのところにまとめられています。彼は今回の戦いの中心的な町であり、当時の王国の首都であったハツオルを火で焼きました。しかし13～14節を見ると、他の町はそうでなかったことが分かります。ハツオル以外の町にあったものは戦利品として自分たちのものにしました。しかしそこにいた住民は、ひとりも残らず剣の刃で打った。後にも触れますが、これは主の命じたもうことであり、彼らに対する主の正しいさばきです。そして実にこれらのことにヨシュアが忠実に従ったことが、強調されています。9節に「ヨシュアは、主が命じたとおりに彼らにして」とあります。12節にも「主のしもべモーセが命じたとおりであった。」そして15節にこう記されています。「主がそのしもべモーセに命じられたとおりに、モーセはヨシュアに命じたが、ヨシュアはそのとおりに行ない、主がモーセに命じたすべてのことばを、一言も取り除かなかった。」ここにヨシュアの祝福と成功の秘訣があったということ、この章は繰り返してこのことを述べることによって強調しています。

もちろん彼の服従の歩みが功績となって、主の祝福を勝ち取ったものではありません。主が恵みによって共にいて下さったから、ヨシュアは困難な戦いにも勝利できました。しかしヨシュアは主に信頼し、主に望みを置いていることを、服従の生活において告白したのです。前に見たアカンのような不服従は主の祝福を遠ざけます。それは主を本当には信頼していないしるしです。都合良い時だけ神を利用する生き方です。そうではなく、ヨシュアは主に信頼し、主に期待を置いていることを、その方の御言葉に従う生活に告白した。その従順な生活に告白される信仰を通して、ヨシュアはこのように主の素晴らしい、人間の思いをはるかに越える導きと祝福にあずかって行ったのです。

さらに今回勝ち取った広い地域について16～17節に記されています。これらの地名とセットで私たちの目に留まるのは18節でしょう。「ヨシュアは、これらすべての王たちと長い間戦った。」つまり、この北部連合軍との戦いはそう簡単ではなかったということです。このことはもともとから言われていました。出エジプト記23章29～39節：「しかし、わたしは彼らを一年のうちに、あなたの前から追い払うのではない。土地が荒れ果て、野の獣が増して、あなたを害することのないためである。あなたがふえ広がって、この地を相続地とするようになるまで、わたしは徐々に彼らをあなたの前から追い払おう。」これは良いタイミングで約束の地を得て行くことができるための主の取り計らいです。しかしその一方で思われることは、忍耐が必要ということです。主が共にいるからと言って、魔法のように簡単に勝利できるのではない。ですから私たちも目の前にある戦いが長く続いても驚くべきではない。神が共にいるということと、長い間戦うこととは矛盾しないのです。長い間続いても、主はその一つ一つに力を与えて、乗り越えさせて下さるのです。

またこのようにして滅ぼされた先住民について、私たちの目を引くコメントが20節にあります。「彼らの心をかたくなにし、イスラエルを迎えて戦わせたのは、主から出たことであり、それは主が彼らを容赦なく聖絶するためであった。まさに、主がモーセに命じたとおりに彼らを一扫するためであった。」一見分かりにくい言葉です。そのまま読むと、彼らの心をかたくなにした原因は神にあるようです。なのに神が彼らをさばき、それは彼らをこの地から一扫するためだったと聞くなり、私たちは

「何とひどいことがここに書かれていることか！」と憤慨するでしょう。しかしこれは彼らが心をかたくなにしたことへの主の裁きです。前に創世記 15 章 16 節を参照しましたように、主はアブラハムの時代からカナンの先住民たちの悪に忍耐して来られました。即座にさばきを下したのでは決してありません。しかしついに彼らの咎が満ちたため、主はさばきとして彼らを彼ら自身のかたくなさに引き渡された。ローマ書 1 章 24 節、26 節、28 節にその表現があります。神は私たち人間が罪に突っ走ることがないように、恵みの御手をもって引き止めて下さっていますが、主の憐れみをいつまでも無視し、かたくなな生活を続けるなら、主はその引き止める恵みの御手を取り去られるのです。するとその人は一層、自分の好きな罪の道に突っ走ようになる。妨げが取り除かれて、益々欲望の赴くままに生活する。そうなったら、悔い改めることはできない状態になってしまいます。滅びに向かって突進するだけです。これは主のさばきなのです。ですから私たちはこのような箇所を読むたびに、いつまでも主の憐れみがあると思っただけではならないと戒められます。悪へ進むことを引き止める主の恵みの御手を取り去られたら、もう私たちに望みはありません。ですからそうならないうちに早く、憐れみがある間に、促しがある間に、悔い改めに向かう者でなくてはならないのです。

最後 21 節からのところにはアナク人の聖絶が記されています。このアナク人はイスラエルが 40 年前にこの地を探った時に恐れた人々です。この背の高い巨人たちを見て、イスラエルは、私たちはこの地に入っていくことはできないと絶望しました。そしてその不信仰のゆえに、40 年の荒野の生活を強いられ、当時 20 歳以上の者は、信仰を表明したヨシュアとカレブ以外、みな荒野で死に絶えました。そのイスラエルが恐れたあのアナク人をも、ヨシュアたちはこのように聖絶できたのです。神の力によるならこのようなことができるのです！こうして最後 23 節に、ヨシュアはその地をことごとく取り、征服は終了したこと、そしてその地に戦争はやんだ、と記されています。次の 12 章では打ち負かした王たちのリストが改めてあげられ、さらに次の 13 章からはいよいよ約束の地の 12 部族への分配が始まることとなります。

以上のヨシュア記 11 章。私たちの前にも、ヨシュアが目前にしたような圧倒的な課題、立ちほだかる壁があるかもしれません。しかし今日の章は、そのような戦いのただ中でも、主こそさらに力強い方であることを仰げ！と私たちに語っています。先ほど申命記 20 章 1 節を参照しましたが、その後の 2～4 節にこうありました。「あなたがたが戦いに臨む場合は、祭司は進み出て民に告げ、彼らに言いなさい。「聞け。イスラエルよ。あなたがたは、きょう、敵と戦おうとしている。弱気になってはならない。恐れてはならない。うろたえてはならない。彼らのことでおじけてはならない。共に行って、あなたがたのために、あなたがたの敵と戦い、勝利を得させてくださるのは、あなたがたの神、主である。」 人間的に考えてどんな困難があろうとも、海辺の砂のような敵の兵士たちがいようとも、多くの馬や戦車があろうとも、主はそれをも上回るお方です。その主に私たちは目を上げ、信頼し、強めて頂いて一つ一つの私たちの戦いに向かって行きたい。そして主にすべての信頼を置いていることを、口先だけでなく、その方の御言葉に従う生活に告白して行きたい。ヨシュアがそうだったように、私たちの戦いも長いものになるかもしれません。信じればすぐ問題が解決するわけではないかもしれない。しかし主の力は十分であり、一つ一つ、戦いを乗り越えさせて下さいます。その主の力によってイスラエルは圧倒的な数を誇る北部連合軍に打ち勝ち、あのアナク人をも打ち倒すことができました。私たちもその主に信頼の目を上げて、一つ一つの戦いに勝利を得させて下さる主の名を呼び求めて歩んでまいりたい。そしてついに主が用意下さった約束のものをことごとく受け取るという祝福へ

導かれて行きたいと思います。